

寺本 実 編著

『現代ベトナムの国家と社会』 —人々と国の関係性が生み出す「ドイモイ」のダイナミズム—

明石書店



分野（以上、掲載順）
について、当該分野の実態を把握するとともに、国家と社会の関係性を軸として分析を行っている。

国家丸抱えの計画経済から市場経済への移行を、比較的速やかに達成してきたドイモイ下のベトナム。社会主義国であることに一般的に由来するイメージとは裏腹に、ベトナムでは社会（人々）が機能し、役割を果たしてきた。

ドイモイ路線は、一九八六年一二月に開かれた第六回ベトナム共産党大会で正式に採択された。先に記したように、同路線の核心は国家丸抱えの計画経済を中心とする経済運営から、市場経済に基づく経済運営への転換にあると考えられる。しかし、その射程は経済分野に止まらず、政治・外交をも含む包括的なものである。

ベトナム地域研究という立場から、ドイモイの流れと動態の方向性を根底において規定するエネルギーと力の源泉を、国家と社会の関係性のうちに探るべく試みたのが、本書である。具体的には、経済開発アプローチ（竹内郁雄論考）、開拓移民政策（若井美佐紀論考）、障害者の生活と福祉（拙稿）、政治動態（中野亜里論考）、という四

本書の構成は、はしがきと序章でベトナムの現状とドイモイの歴史的な流れを概観したうえで、「本論」たる各論に入る。そして、最後に主関連先行研究のレビューを行った補章、あとがきにつながる形をとっている。

以下、各章ごとに内容を簡単に紹介していききたい。

はしがき、序章「ドイモイの歩み」(以上、拙稿)では、ベトナムの現状とベトナム戦争終了以後のドイモイに関する歴史的流れについて、「本論」に向けての前段としてまとめている。

第一章「ドイモイ下のベトナムにおける『共同体』の存在と役割および『政府』の失敗—経済開発論的アプローチからみた『国家』と『社会』との関係」(竹内論考)では、古田元夫東京大学大学院教授の著作における国家と社会というキーワードを、新制度派的な経済開発論で使われる「政府」、「市場」、

「共同体」というキーワードに置き換え、ベトナムの経済開発の過程における『政府』と『共同体』との関係がどのような形で捉えられるのかを分析している。

第二章「ベトナムにおける開拓移民政策からみた国家と社会の関係—一九八〇年代の南北間人口移動の実態を中心に」(若井論考)では、一九八〇年に大きく方針転換された開拓移民政策の展開を通して、ドイモイ萌芽期における「農村社会」と「国家」の関係について考察している。なかでも、ドイモイ以前のベトナムの農業・農村政策のなかで、集団化に「対抗」する社会組織として扱われてきた家族に着目し、その開拓移民政策における位置付けの転換について分析を行っている。

第三章「ドイモイ下ベトナムの障害者の生活における『国家』と『社会』—红河デルタにおける事例研究を通して」(拙稿)では、北部红河デルタ地域で実施した事例研究に基づいて、ベトナムの障害者の生活における国家と社会の関係性について考察している。同作業を通してベトナムの国家と障害者（社会側）の関係における類型の抽出を行うとともに、同分野における国家と障害者（およびその家族）の役割分担について考えている。

第四章「ベトナムにおける党—国家と市民社会の関係性—『実社会』からの政治改革の要求」(中野論考)では、ベトナムの現政府（共産党政府）が「公的イデオロギー」の上で認定している国

家と社会の関係性を明らかにした上で、現実にはその関係性がどのような様相を呈しているかを具体的事例から検証している。分析に際しては、「公民社会」、「実社会」というモデルを構築、用いつつ、ベトナム社会のなかで近年「党の政治イデオロギーの枠を超えた市民による政治的活動が萌芽、発展しつつあることに着目し、そのような活動と国家との関係性の様態」にまで考察を進めている。

補章「先行研究の概観と本書の位置づけ」、あとがき（以上、拙稿）では、ベトナム地域研究における、国家と社会分析視角に関わる先行研究をレビューし、ベトナム地域研究上の本書の位置付け、総合的観点からみたフラインディングについて述べている。

現体制の堅持という側面では、ベトナムの国家は依然としていわゆる強い国家であるに違いない。しかし、本書の取り組みを通して、ベトナムの社会がドイモイの展開を促し、支え、ある意味で牽引していることが、具体的に検証されたと考えられる。特に国民の生活に関わる領域では、社会の力、機能、協力がなくしては成り立たない。分野に応じて様相は異なるが、国家が担うべきことと社会が担うべきことの「均衡点」を求めて、今後もベトナムの国家と社会は、相互に作用し合うものと考えられる。

（つらもと みのる／アジア経済研究所 東南アジアII研究グループ）